

シリーズ 私の一冊の本

看護学部 金澤寛明 先生

細川宏著 小川鼎三, 中井準之助編 『詩集病者・花:細川宏遺稿詩集』

閲覧室 2階 490.4/H 94 現代社 出版

電話と言えば黒電話で、携帯電話はおろか留守番電話も無かった、今とは少し時の流れがゆっくりだった学生時代、アパートにはテレビも無かった。海に沈む夕陽を見ながら学友と人生とはなんだと語り合うのが日常だった（当然それは酒が入り加熱していくのだが、私自身あまり飲めないなので、途中退散していたが）。

また夜、試験勉強をしていると、電話が鳴り、借りていたノートを返すとの言葉、気分転換になるかと待ち合わせ場所に行く、冬の新潟である、道の雪は凍てついている。ちょっとドライブしないかと車に乗せられ連れて行かれたのが、白鳥の湖「瓢湖（ひょうこ）」。真っ暗であるが、しばらくするとぼっと白く白鳥が浮いているのが見えてくる。お互い無言の時間が20分ぐらい。寒いし帰ろうかとそれで帰宅する。

そういう青春?の時期を過ぎて、顕微鏡を覗くのが好きだった私が入り浸るようになった解剖教室の図書室（ここもまた、何かがあると宴会場になっていた）で、教授がある日読んでみたらと、貸してくれた本が今回紹介するものである。

「病人と健康な人を距てる城壁は高く堀は深い・・・」

「病者・花—細川宏遺稿詩集」、44歳でがんで亡くなった東大神経解剖の教授が、闘病1年間につづった詩や日記を、師友によってまとめられたものである。

がんとの闘いを、医学者と患者という二つの立場から見ている24頁にわたる「病者(ペイシェント)」、おそらく病室に届けられた花を見て読んだのであろう「花さまざま」、病室で思い浮かんだことや病気との闘いを詠った「胸の水」、最後の一月を綴った「最後の日記」の4部からなる。

詩でありますから、どのように読み取ろうとも、読んだ人が感じたものが全てで、この詩集から患者さんに接する医療従事者の心構えを学んで欲しいなどとは書きません。

まず、何で解剖の教授が私にこの詩集を貸したのか判らないですし、私自身が当時この詩集を読んで何を感じたのか、憶えていないのです。ただ、本を返してから自ら購入し、何度か読んでいます。さらに同級生に貸しています。それは今回、本棚から取り出した際に、感想が書かれた便箋、そしてどう考えても私のものではない葉がはさまっていたことから判ります。

がんばり屋の女剣士だった彼女とは講義ノートの貸し借りを入学当初から卒業までずっと続けていて、その間に読んでみたらと、この詩集を貸したようです。卒業後、私はすぐに解剖の大学院に入り、患者さんと接するということをしないで今に至っている。実は、患者さんが死ぬのを目にするのが嫌だったから、基礎医学に進んだのかもしれないですね。そのように私が思い、基礎に進むように解剖の教授が考えて貸したのでは無いと思いますが。

では、感想もメモも残さなかった私とは違い、感想を書ってくれた彼女の方はあの当時この本を読んだことがどれだけ、記憶に残っているのか尋ねてみたいのだが、それはできない。もうこの世には居ないのだから。